



お伽話 猫なし村

硯山人

シルダと云ふ村では、むかしから猫と云ふ獸が一匹もゐませんでした。で、シルダ村には鼠の多い事それはくたいした物でして、うつかりしていようものなら何でもかでも皆噛られてしまいます。村人は大層閉口致しまして、どうかして鼠を退治したいものだ、兼々思つていました。或る夕方、の事でした一人の旅人、か手の上には小さな猫を抱いてこの村のとある小さな旅籠屋にとまりました。その晩のことでしたが、旅籠屋の主人は旅人の室にやつて余りまして、いろ／＼と世間話の末

どうもこの村には鼠がたくさんゐて困ると話しました。それをききました旅人はこれはべたと思いましたがさあらぬ顔付で。

旅人「それは定めし御困難なことでしよう、幸私は茲に「猫」と云ふ黠を持っています。これはそれは上手に鼠をとります」と云ひながら、手に抱いた猫を放してやりますと、何しろ今迄餓っていた小猫ですから、見る間に、天井裏や戸棚の隅などかけまはり、大きな鼠を二三匹生捕して、旅籠屋の主人の目の前で、ムシャ〜と食べてしまいました。

これを見た旅籠屋の亭主は大層びっくり致しました。

「之は御珍しい物で御座いますね。どうか之れを私に賣て下さいませんか」とたのみましたので遂々賣ることになりました。

さて翌朝旅人は急ぎの用事があるので朝御飯もそこ〜にして出立致しましたので宿屋の主人は猫

の飼方を聞いて置くことをすつかり忘れてしまいました。さあ大變折角猫を貰つても飼ひ方がわからなくては仕方がありませんから大急ぎで下男に云ひ付けて旅人の跡を追ひ掛けさせて何を食べさせるのか聞かせました。そこで下男は偉駄天の如く走けて行つて旅人を追ひかけて。停車場へ行つて見ると丁度今流車が動き出した處で旅人は向ふの窓から首を出して見て居ました。下男は大きな聲で

「猫は何が一番好きですか」と聞きますと、旅人は

「そーさね、小供よりは老人が好きだよ」と、云ふ間に流車は見えなくなつてしまひました。下男はびつくりしたのしないのつて「是は大變だ、あの猫は人が大好きで殊に老人が大好きだと云ふからには是からは毎日村のおぢいさんやおばあさん殺して食べさせなければならぬ。あゝとんでもないものを貰つたものだ」と思ひながら歸つて來て

早速主人に話すと是も亦大變な驚きで、

「それはいけない人を食べる様な獸を飼てをくよ
り鼠の方が餘程い」と云つて早速「猫」を殺せと
村人に下知しました、

その時丁度猫は大きな粗食でしきりと鼠狩をやつ
ていましたので村の若者は急いで粗倉に四方から
火を放ちました。折から風かヒュー〜と吹いて
ましたので見な〜火の手が盛んになり今度猫は
を殺すどころのさばぎではなく一生懸命に消防に
盡力致しましたがとう〜その甲斐もなくシルダ
村は皆灰になつてしまいましたとさ。
(なはり)

愛らしのカーール

つる子

昔々獨乙の片田舎にカーールといふ子が居りました。
年は九ツ薔薇色の兩の頬、ぱつちりして、愛
嬌ある其目、額に波うつ金色の髪など、げに、愛
らしい一少年で御座いました。年とりたるヒルダ

といふ姉様の外兄弟皆で五人、御母様は幼き昔な
くなつて、御父様の手一つで育ちましたが、家が
大層貧しいので寒さと飢とはよく此兄等の知つ
て居つたまで御座いました。而し有福の家の子
よりも猶幸福で、あつたのは五人とも大層仲よ
しで粗末な食物に満足しつゝ、誠に楽しく暮した
そうで御座います。中にもカーールは幼いながら
も中々親切な強い子で、何時も顔よく買物かひに
参りましたが、或る夕方カーールは隣村まで買物
に参りましたが、丁度冬の最中として、白雲にとざさ
れたる廣い廣い野原を横ぎり、寒さにまけず、風
に怖ぢず、凍える手に、大きな牛乳の瓶をさげて
我家をさして急ぎました。山は冷めたき月の夜に
静かに白く、星は輝く、唇に「急げカーール子供
達が待つて居ます」と云つてるやうに見えて居ま
す。急ぎ急いで、カーールは終に、重苦しげに雲
を靄へる我家の窓に、樂しげに輝きかどれる燈火
を見たときには、寒さを忘れ、飢を忘れ、思はず